

人生の贈りもの

「クビ」の前に想像力を

生命誌研究者 中村桂子(73)

①

—「派遣切り」の言葉に象徴される不況です。生命を研究され、どう感じていますか
経済や経営状況から、働いている人のクビを切らないと成り立ちませんという答えはコンピューターのもです。
人間らしく生きられる、正しいな能力が想像力。働いている人の向こうに赤ちゃんや学校に通う子どもがいる。人間なら、クビを切らない方法はなにかとことん考えるはず。
クビの前に想像力を働かせ考

えることがあるのに、その気配は感じられない。すぐにクビを切らないと企業が危ないというのでは本当でしょうか。
「お前は、いらぬ」。そう言える人はいますか？ 言われるべき人もいない。人と付き合うと尊敬の気持ちが生まれる。経営者や政治家、官僚の発言にそれを感じられず怒りを通り越して、つらい。同じ世界で生きているという共通の基盤が感じられない。
—「共通の基盤」を感じ



「競争より命の方が大事でしよう」
—荒元忠彦撮影

られることがあった？

小学生のころは戦争中で貧しかった。愛知県に疎開し、海の幸のほか、畑でイモがとれた。作っているお米は、兵隊さんに食べてもらわないと戦争に勝てないと先生に教えられ、目の前からほとんど消えた。ひもじくても、我慢した。だから、どんなことがあっても、何とかすれば生きていける自信があります。

—一方で、自由な家庭に育ったということですね
両親に「ダメ」と言われた記憶はない。父は会社員でしたが、「面白い」と裁縫をするような人でした。私はあらゆるものを認め、「何でもやってみよう」と思う柔らかい子だった。

人間は3歳ごろから、「な

ぜだろう」と考えるようになる。本質を問う姿勢を持ち続けることは大事です。社会がおかしくしたら、若い人たちがもっと発言していい。大事なことを守り抜くことも少なくなりました。「何か言っても仕方ない。世の中ってこんなもんだよ」と調整していくことが多いのではないかしら。

いまだに青臭いところがあって、納得できないことは出ないと言っている。研究者は社会のことを考えないでいいとも、勝手なことをしていいとも思いませんが、正しいなことは何か、人間とは何かを毎日考えていい。私は競争よりも、命の方が大事でしょうと考え続けてきました。

(聞き手・平出義明)

なかむら・けいこ 1936年東京生まれ。三菱化成生命科学研究所、早稲田大教授を経て、02年からJTI生命誌研究館長。生命の歴史を読みとる「生命誌」を提唱する。